「五本骨扇に月丸」の佐竹氏家紋

連載

常陸時代の佐竹氏
― 500年の軌跡を追う ―

【第6回】

金砂合戦で敗れ、９年間「流浪」の身に

峻険な山城、「金砂城」

１０月下旬、秋晴れの奥久慈の山に入った。峻険な山城、「金砂城」（西金砂城）を平地側から見てみたい、と思ったからである。金砂城は、常陸太田市上宮河内町の西金砂神社あたりにあった山城である。

国道１１８号を大子方面に向かい、常陸大宮市山方で久慈川に架かる「岩井橋」を渡る。県道２９号（常陸大田那須烏山線）の途中で常陸太田市の住民２人と合流。一路、常陸大宮市諸沢を目指す。視界が広がった道沿いに「見晴らしの丘」と書かれた看板を発見。地元住民に尋ね、その丘がある「諸沢三区農村集落センター」へ向かった。眺望が広がる。同センター広場から正面に山並みが見える。緑に覆われた木々の間に断崖絶壁の岩肌とその上に建つ小さな社が確認できた。「あれだ。間違いない」。

もっと近くでみようと、一同、もと来た道に戻り、見えそうな場所を探す。しかし、木々に遮られてみえない。そこで、西金砂神社へ行く上宮河内町の通称「さくら街道」から探すことにした。途中で脇道に入り、山道を歩く。「うえまつ」という小字名の場所にたどり着いた。背丈が数メートルの雑草の合間から断崖絶壁の岩肌と社がみえた。今から８４３年前、源頼朝による佐竹氏「追討」の戦いがあった場所である。鎌倉幕府が編さんした歴史書『吾妻鏡』に「城郭は高山頂に構え」、「両方（敵と味方）の在所、天地の如し」とある。まさに記述通りの光景が広がっていた。

頼朝反転、佐竹氏討伐へ

常陸平氏に加え奥州藤原氏とも姻戚関係を結んだ佐竹氏は、三代隆義、四代秀義の時代、「奥七郡」（常陸国北部地域）を領有し、強大な勢力を誇っていた。そんな時、伊豆で「流人」の立場にあった源頼朝が以仁王の平家打倒の令旨に応えて挙兵した。治承４年（１１８０）の事である。富士川の戦いで平家軍に勝利した頼朝は、京都に攻め上ることを止め、急遽、常陸の佐竹氏攻めに転じた。

その理由について、ここでは久保田藩（佐竹藩）が江戸時代にまとめた『佐竹家譜』の「秀義」の項の記述を紹介する。「千葉、三浦の宿老、諫て、曰く。忠義、秀義等数百輩を相率と雖、未だ帰服せず。且、秀義が父隆義当時平家に従て、在京せり。先ず佐竹を征して後平家を攻るべしと」。当時の佐竹氏は、平氏政権下、秀義の父隆義は「大番役」を京都で務めていた。そうしたこともあって佐竹氏は頼朝の挙兵に賛同しなかった。

隆義の兄、忠義（二代佐竹氏当主）は外戚にあたる平氏の吉田某家断絶により、その家名を継ぎ、府中（石岡市）に移っていた『寛政重修諸家譜』。その忠義の名前が南北朝時代の成立とみられる軍記物『源平闘諍録』に出ている。忠義が頼朝を討つため「大将軍と為て、与力の輩、下妻の四郎広幹、同じく舎弟東条の五郎貞幹（以下略）、二万余騎、常陸国から下野国に発向す」という記述がある。しかし、合流を期待した「足利の太郎俊綱」に行軍を諫められた。このため忠義は「常陸国佐竹の館へ戻った、という。

軍記物ながら頼朝が常陸国に入る前の反頼朝に関する動きである。事実関係の吟味を含め注目さていい記述ではないだろうか。

身内の裏切りで落城

頼朝が常陸国へ入国事、佐竹氏の勢力は『吾妻鏡』によると「権威境外に及び、郎従国中に満つ」とされる。手ごわい相手と映っていたようだ。そこで頼朝は宿老「上総権介広常」を遣わし、佐竹館の忠義をおびき出した。『寛政重修諸家譜』によると、忠義は「頼朝将軍のために大矢橋」において殺害された」とある。大矢橋は石岡市と小美玉市の境を流れる園部川にかかる橋である。

『吾妻鏡』は大矢橋で誅殺した武将を「義政」と書いているが、「義政」は各種系図の記述からみて忠義のこと、と考えられる。秀義は叔父の忠義が討たれたことを知ると、要害堅固な金砂城に籠った。そこは攻める側と守る側の場所が「天地の如し」の所である。頼朝軍は手も足も出なかった。そこで再び上総権介広常が登場する。頼朝に忠義の弟にあたる義季は「智謀勝人なれど欲心世を超ええる也。恩約有れば定めし秀義滅亡之計りを加えん」と進言した。

義季の手引きで頼朝軍は金砂城の後方から攻め入った。不意を衝かれた佐竹軍は、総崩れをとなり、秀義は山越えをしながら「奥州花園城」(『吾妻鏡』)に落ち延びた。花園城は花園神社(北茨城市)あたりにあった、と見られている。義季は合戦終了後、頼朝に会い、「門下の由を望み申し、許容」(『吾妻鏡』)されている。しかし、手引きの「恩賞」として秀義の所領、奥七郡を与えられたという記述はみあたらない。

『吾妻鏡』は奥七郡幷太田、額田、酒出等所々は収公され、行軍の士の勲功賞に宛がわれた」とある。

佐竹氏、9年間「流浪」の身に

頼朝軍は金砂城を破却し、常陸国を去った。花園城に逃げ延びた佐竹秀義を頼朝は深い追いしなかった。なぜか。佐竹氏は、常陸平家や奥州藤原氏と姻戚関係を結び、常陸国北部に強大な勢力を築いた。姻戚関係にある常陸平家は、『源平闘諍録』に忠義の輩として下妻氏ら常陸平家の一族が名を連ねているが、この動きは不発に終わった。しかし、もう一方の奥州藤原氏の動きは不明である。ここからは筆者の推測になるが、頼朝は、これ以上佐竹氏を追い詰めると、奥州藤原氏が南下してくるのではないか、と危惧を抱いたのではないか。だから深追いをしなかったのではないだろうか。

頼朝が去った後、佐竹氏の支配地だった奥七郡は、恩賞として頼朝麾下の武将たちに分け与えられた。そうした中で公家の日記『玉葉』の治承5年(1181)4月21日条に「佐竹の一党三千余騎、常陸国に籠り、其の名を思うに依て、一矢射るべきの由、存ぜしむと云々」という記述がある。佐竹の名において、おめおめと黙って引き下がってはいられないと「三千余騎」もの佐竹勢が一矢報いんと息巻いている、という話である。こうした動きが奥州藤原氏と関係があるのか、どうかは不明である。ただ、金砂合戦の状況は佐竹氏から藤原氏に伝えられていたのではないか、とみることはできるであろう。

佐竹氏は、合戦後、接収された常陸国北部で、新たな支配者となった頼朝麾下と小競り合いを繰り返していた可能性は十分、考えられる。頼朝は奥州平泉の藤原泰衡追討のため文治5年(1189)、鎌倉を出立した。佐竹氏は、この間、足かけ9年間、常陸国北部之山中に身を潜めていた。この期間の佐竹氏がどのような立場にあったのか、詳細はわかっていない。いわば「流浪」の身といえる。しかし、その間、慣れ親しんだ多賀山地や阿武隈山地の山々が佐竹氏を守ってくれていたことは間違いない事であろう。

岩瀬与一太郎のこと

最期に金砂合戦を象徴するエピソードを一つ。金砂合戦で敵方に捕まった佐竹氏家臣の岩瀬与一太郎は頼朝の前で「平家追討のため力を合わせなければならない時に同じ源氏の佐竹氏を滅ぼそうと戦を仕掛けるとは何事か、到底、納得できない」と涙ながらに訴えた。頼朝はこの心意気に打たれたのか、与一太郎を将軍直属の家臣である御家人にした、と『吾妻鏡』は伝えている。

歴史ジャーナリスト
茨城県郷土文化研究会会長
冨山 章一

手前の道路の先、深い渓谷の先に連なっている山並みに岩肌と社がみえる＝常陸大宮市諸沢の「諸沢三区農村集落センター」の広場から(筆者撮影)